

氏名	おおかんだまこ 大神田 麻 子
学位(専攻分野)	博士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 435 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	反 応 バ イ ア ス の メ カ ニ ズ ム と 文 化 差 —— はい/いいえ質問に対する就学前児の回答に関する検討 ——

論文調査委員 (主 査) 准教授 板倉 昭 二 教授 藤田 和 生 教授 櫻井 芳 雄

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論は、大人と子どもの質問のやり取りにおいて生じ、子どもがコミュニケーションを上手く行えない一因と考えられる「肯定バイアス」について検討したものである。肯定バイアスとは、「はい」か「いいえ」で答える質問（Yes/No質問、以下YN質問と略す）に対して、「はい」と答えてしまう現象のことである。肯定バイアスは、質問に対してある一定の反応を返してしまう反応バイアスのひとつで、他に「いいえ」と言うことが多い否定バイアスなども存在する。

第1章では、先行研究の問題点と本研究の目的について述べた。これまでの肯定バイアスに関する研究では、子どもがなぜ「はい」と答えることが多いのかに対する理由として、質問者が大人であることが指摘されてきた。子どもは、大人の質問に答えなければならないという重圧を感じていたり、大人に好かれたい、同意したいと思っているために、大人のYN質問に「はい」と答える。一方、基本的な認知能力の未発達肯定バイアスの原因とも考えられている。すなわち、質問に正しく答え、コミュニケーションを円滑に行うためには、質問の文脈や意図の理解といった語用論的理解が必要である。本論文では、肯定バイアスがどのような条件下で生じるのか、肯定バイアスが認知能力の問題であるのかについて検討した。

第2章では、肯定バイアスが文化普遍的な現象であるかどうかの確認を行った。その結果、日本とベトナムの子どもは、北米の子どもと同様に、2、3歳ごろには物の知識について聞くYN質問に肯定バイアスを示し、5歳ごろには正しく答えられることが分かった。つまり肯定バイアスという現象は、住んでいる国や話している言語に関わらず、2～3歳の子どもに見られる共通の側面を持つことが示された。一方、文化による差も見られた。日本の子どもは自主的に「分からない」と答えたり、質問に何も答えない無言反応を示したりすることが多かった。また、日本とベトナムの子どもの肯定バイアスは消失が遅く、4歳児においても示された。肯定バイアスには文化普遍的な側面と、文化によって異なる側面のあることが示唆された。

第3章では、肯定バイアスが生じる条件や、どのような認知能力が肯定バイアスに関わっているかといった、肯定バイアスが生じる普遍的なメカニズムについて検討した。2～3歳児は質問者が母親であった場合にも、また3歳児は好き嫌い質問や表情について聞く質問など、物の知識を聞くYN質問以外にも肯定バイアスを示した。肯定バイアスは、ある状況や、ある文脈の質問に限定しない、日常的に聞かれるようなYN質問にも生じる現象であった。また、3、4歳児の肯定バイアスは、言語能力および抑制機能と深い関連のあることが示唆された。さらに3歳児は質問の正答を知っているにも関わらず、YN質問形式で質問をされると肯定バイアスを示すことが分かった。以上のことから、3、4歳児は、「はい」という優位な反応の抑制や質問の文脈理解などの語用論的理解ができず、肯定バイアスを示すことが示唆された。一方、4歳児は好き嫌い質問や表情質問のような比較的容易な質問には正しく答えられるが、物について問う難しい質問には、正しく答えることができなかった。これはちょうどこの年齢が発達の過渡期にあたるためである可能性が高い。また、6歳児は実験者が何を知りたいかを理解しており、自分の意見を的確に伝えるために、むしろ否定バイアスを示す傾向にあった。

肯定バイアスは文化普遍的に起きる現象であることが確認されたが、一方でYN質問にどう答えるかに文化差があること

が分かった。アジアの子どもは、西洋の子どもに比べると、「はい」か「いいえ」の明答を避ける傾向にあった。また、肯定バイアスの消失も遅かった。

そこで第4章では、日本の子どもと、異なる2つの国の文化に接し2つの言語を話す日仏バイリンガルの子ども、およびハンガリーの子どものYN質問に対する反応態度と、肯定バイアスの消失パターンの違いについて比較検討した。その結果、日本の子どもは、母親が相手であっても、無言反応や「分からない」と答える反応を示すことが分かった。このような反応は、見知らぬ大人に対する遠慮や人見知りの原因ではなく、日本の子どもが有している他者に対する特異的な態度である可能性の高いことが示唆された。また、日仏のバイリンガルでフランスに居住している子どもたちでは、無言反応の代わりに、自分の知っていることを答える反応が見られた。この反応は西洋と東洋の中間的態度であると想定される。このような文化的態度は、母親の養育態度と文化的環境の両方によって形成されるのかもしれない。さらにバイリンガルの子どもの場合、言語能力の未熟さと肯定バイアスが関連していることが示され、肯定バイアスには語用論的理解が必要であることが確認された。またハンガリーの子どもの肯定バイアスは、3歳ごろまでは北米や日本、ベトナムと似た傾向を示したが、4、5歳児は否定バイアスを示すという、他国とは異なる反応パターンを示した。3歳ごろまでの子どもの肯定バイアスは、おそらく自動的な反応であり、このことは文化普遍的であるが、それ以降、子どもがどのようにYN質問に答えるようになるかについては、文化によって異なるのかもしれない。

第5章では、肯定バイアスを含む反応バイアスのメカニズムについて論じた。肯定バイアスは、自動的に生じる反応と、相手のメッセージや質問の文脈を考慮した結果「はい」と答える2種類に分類できると考えられる。自動的な肯定バイアスは、3、4歳児の肯定バイアスであり、抑制機能や言語能力の未発達によって生じる。一方、年長の子どもは、相手のために「はい」という反応を選び、これは自動的に生じるものとは明らかに異なると考えられる。こういった肯定バイアスは、大人の肯定バイアスと同じようなメカニズムで生じている可能性が高い。また、相手のためにつく嘘で見られる「はい」という反応も、こういった意味のある肯定バイアスであろう。さらに6歳児は、文脈によっては「いいえ」と答える否定バイアスを見せるが、これも意味のある肯定バイアスと同様に、質問の文脈を考慮した選択であるだろう。こういった文脈に沿って「はい」か「いいえ」を選択した結果として生じる反応バイアスは、年少の子どもは自動的な反応である肯定バイアスとは明確に異なり、また区別されるべきものである。年長の子どもは、質問者が大人であるという理由も含め、さまざまな社会的な要因によって肯定バイアスか否定バイアスを示すものと思われる。

今後の課題として、子ども同士の質問のやりとりにおいても、肯定バイアスが生じるか否かについて検討すべきである。もし年少の子どもは肯定バイアスが自動的な反応であれば、子ども同士の質問のやり取りにおいても肯定バイアスは生じるはずである。また、「はい」「いいえ」の反応を示すまでの時間、すなわち反応時間の検討も有効である。もし年少児の肯定バイアスが自動的な反応であれば、反応時間は短い、年長の子どもは「はい」か「いいえ」の反応を示すまでに一定の時間を要することが予測される。

本論では、また、YN質問に正しく答えられるかどうか子どもの語用論的理解の1つの指標となり得ることも示された。このような研究は、子どもの他者理解、すなわち心の理論研究にも重要な示唆を与えることが期待されるものである。

## 論文審査の結果の要旨

幼児は、大人の質問に対して、何でも肯定的に答えてしまう傾向がある。たとえ、その質問に対する正しい知識を有していたとしても、「はい」と答えてしまう。例えば、赤いりんごを見せて、「これ青いね」と聞いた場合に、「うん」と答えてしまうといった具合である。発達心理学の領域では、幼児のこのような傾向を「肯定バイアス」という。就学前児を対象とした発達心理学研究の多くが、「はい/いいえ質問」をもとにおこなわれており、幼児の肯定バイアスに関する研究は、この領域全体に関わる重要な問題である。また、近年、さまざまな犯罪に対する子どもの目撃証言の重要性が高まっており、子どものこのような傾向の解析は急務である。幼児における「肯定バイアス」の問題は極めて重要であるにもかかわらず、これまで日本では扱われてこなかった。論者は、こうした現状に目をつけ、本テーマを博士論文の研究対象とした。論者の、研究に対する眼力の鋭さを示すものであるといえるだろう。本研究は、就学前児が、大人の質問に対し、どのような肯定バイアスを示すのか、文化的要因はあるのか、文化を越えた普遍性はあるのか、どのような文脈でどのように生起するのかを

詳細に分析することから、子どもの肯定バイアスの発生メカニズムに迫った意欲的な研究として高く評価される。

論文は5章からなる。第1章では、これまでおこなわれてきた幼児における肯定バイアスの研究を丁寧にレビューし、肯定バイアスが生ずる原因として2つの要因を指摘する。ひとつは、質問者が大人であるために、質問に答えなければならないという重圧から肯定バイアスを示すというものであり、いわば「他者効果」とでも呼ぶべきものである。もうひとつは、質問の文脈的理解が不十分であるために肯定バイアスを示すというものである。論者は、このような問題を的確に洗い出し、この2つの要因がどのように肯定バイアスに影響を与えているかを検討する重要性を、乳児のコミュニケーションの発達を中心に据えて論じる。

第2章では、幼児の肯定バイアスが文化普遍的なものであるのかについて、ベトナムと日本の幼児を対象に実験的調査をおこない、それらの結果を北米における先行研究の結果と比較検討した。通常、文化比較は、洋の東西でおこなわれることが多いが、同じアジアに属するベトナムでの調査をおこなうことで、さらに新たな知見を得ることも目的とした。その結果、日本の幼児およびベトナムの幼児においても、北米の子どもと同様、肯定バイアスを示すことが確認された。すなわち、2～3歳では、物に対する知識をYN質問の形式で問われた場合には、肯定バイアスを示し、5歳ではそうしたバイアスを示さなかった。このことから、幼児の肯定バイアスは、文化普遍的に認められる現象であることがわかった。これは、アジア圏でおこなわれた肯定バイアスの最初の報告であり、極めて貴重な報告である。一方で、文化差もみられた。北米の子どもに比して、日本・ベトナムの子どもでは、肯定バイアスの反応の消失の仕方が遅れていた。北米の子どもでは、4歳ですでに肯定バイアスが減少するのに対して、日本・ベトナムの子どもでは、4歳においても依然として肯定バイアスがみられた。また、同じアジア圏である日本とベトナムの子どもにおいても文化差がみられた。すなわち、ベトナムの子どもに比べて日本人の子どもは、「はい」「いいえ」の代わりに、無言反応や「わからない」と答えることが多かった。こうした、反応は日本の子どもに特異的な反応で、論者によって初めて指摘されたものである。こうしたところにも、本研究のオリジナリティの高さがうかがえる。

第3章では、質問者や質問内容を変えることにより、肯定バイアスが生じる条件の分析を、また、社会的認知能力、言語能力、および抑制能力との関連を調べることにより、どのような認知能力が肯定バイアスに関わっているかを論じる。通常は、見知らぬ実験者が質問者となり実験をおこなうが、母親が質問者となった場合でも、肯定バイアスは生じることがわかった。肯定バイアスは、質問者と子どもの関係には影響されないのである。すなわち、肯定バイアスは、従来考えられていたような見知らぬ大人からの質問による重圧ではないことが示された。これは論者による全く新しい発見である。また、3歳児では、物に関する知識を問う質問の代わりに、好き・嫌いを問う質問や表情の同定を問う質問に対しても肯定バイアスを示すことがわかった。これまで、物に関する質問のみが実施されてきたが、質問内容の領域固有性にまで踏み込んだ実験は、論者が始めて実施したもので、論者の卓越した研究センスがうかがわれる。物の知識について実験者が質問するという紋切り型の方法から脱却し、質問者や質問カテゴリーを変えるという新しい切り口で幼児の肯定バイアスの出現条件を実証的に示した意義は大きい。一方、肯定バイアスの生起を規定する認知能力については、社会的認知能力や言語能力を測定する課題や抑制能力を評価する課題を同時におこない、それらとの相関を調べた。その結果、肯定バイアスは、言語能力や抑制能力に大いに関連のあることが示された。肯定バイアスの出現は、「はい」という反応を抑制できないが故に生じる可能性を示したことは興味深い。

第4章では、日仏バイリンガルの子どもとハンガリーの子どもを対象として実験をおこない、第2章に加えて、さらに肯定バイアスにおける文化差や文化的態度の影響について論じる。日本の子どもたちにおけるYN質問に対する反応の特徴として、質問者が母親であっても、無言反応や「わからない」といった反応があげられるが、日仏バイリンガルで、フランスに居住している子どもたちは、そのような反応の代わりに、自分が有している知識を答えるという反応がみられたことを指摘する。論者は、こうした反応を西洋と東洋の中間的反応と捉える。また、ハンガリーの子どもでは、3歳までは北米や日本・ベトナムの子どもと同様の肯定バイアスの発達パターンを示すが、4、5歳児では否定バイアスを示すという結果を得た。3歳までの肯定バイアスは、どの文化でも同じように立ち上がるが、それ以降の肯定バイアスには文化的要因が強く関与するのではないかと論者は考える。

以上のことを受けて、第5章では、就学前児の肯定バイアスは、2～3歳までは、抑制機能や言語能力に大きく規定され

るほぼ自動的に生じる反応であり、それ以降に生じる肯定バイアスは、文脈や相手との関係などに立脚した意味のある反応バイアスであると論者は結論づける。本研究は、YN 質問に対する幼児の反応を分析するという比較的単純な方法でありながら、幼児のコミュニケーションの様相に迫る潜在性も併せ持つ研究と位置づけることができる。

もちろん問題点もないわけではない。第 1 章では、先行研究をレビューしているが、多少冗長なところが散見され、この印象は本論文全体の印象でもある。また、肯定バイアスに与える文化的要因に切り込もうとしているが、文化の差異と言語の差異は同じものなのか、また異なるものなのか、内包関係にあるのかなどの議論がなされていない。さらに、肯定バイアスのメカニズムを解明することを主眼に置いてはいるが、その議論ももう少し掘り下げて欲しかったという率直な感想も否めない。しかしながら、これらは本論文の価値を損なうほどのものではなく、むしろ今後の研究の発展に期待すべきものであろう。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2008年1月31日、調査委員3名が本論文とそれに関連したことがらについて口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。